

古千屋

芥川龍之介

榎井^{かしい}の戦いのあつたのは元和元年^{げんな がんねん}四月二十九日だつた。大阪勢^{おおさかぜい}の中でも名を知られた塙団右衛門直之^{ばんだんえもんなおゆき}、淡輪六郎兵衛重政等はいずれもこの戦いのために打ち死した。殊に塙団右衛門直之は金^{きん}の御幣^{ごへい}の指し物^{さしもの}に十字^{じゅうもんじ}の槍^{やり}をふりかざし、槍の柄^{つか}の折れるまで戦つた後^{のち}、榎井の町の中に打ち死した。

四月三十日の未^{ひつじ}の刻^{こく}、彼等の軍勢を打ち破つた浅野但馬守長晟^{あさの たじまのかみながあきら}は大御所徳川家康に戦いの勝利を報じた上、直之の首を献上^{けんじょう}した。(家康は四月十七日以来、

にじよう

二条の城にとどまっていた。それは將軍秀忠ひでただの江戸か

じようらく

ら上洛するのを待った後のち、大阪の城をせめるためだっ

た。この使に立ったのは長晟けいらいの家来せきそうべえ、関宗兵衛、

てらかわさまのすけ

寺川左馬助の二人だった。

ほんださどのかみまさみ

家康は本多佐渡守正純に命じ、直之の首を実検しよ

うとした。正純は次ぎの間まに退いて静に首桶くびおけの蓋ふたをと

り、直之の首を内見した。それから蓋の上に卍まんじを書き、

さらにまた矢の根を伏せた後のち、こう家康に返事をした。

なおゆき

「直之の首は暑中の折から、頬ほおたれ首くびになっておりま

す。従つて臭気も甚だしゆうございますゆえ、御検分ごけんぶん

はいかがでございましょうか？」

しかし家康は承知しなかった。

「誰も死んだ上は変りはない。とにかくこれへ持つて参るように。」

正純はまた次ぎの間へ退き、母布をかけた首桶を前にいつまでもじつと坐っていた。

「早うせぬか。」

家康は次ぎの間へ声をかけた。遠州横須賀の徒士

のものだった塙団右衛門直之はいつか天下に名を知られた物師の一人に数えられていた。のみならず家康の妾お万の方も彼女の生んだ頼宣のために一時は彼に年ごとに二百両の金を合力していた。最後に直之は

武芸のほかにも だいいりゆうおしょう 大竜和尚の えか 会下に参じて一字不立の

道を修めていた。家康のこういう直之の首を実検した
いと思つたのも必ずしも偶然ではないのだつた。……

しかし正純は返事をせずに、やはり次ぎの間に ひか 控えていた なるせはいとしようまざなり 成瀬隼人 どいおおいのかみとしかつ 正正成や土井大炊頭利勝へ問わず語りに話しかけた。

「とかく人と申すものは年をとるに従つて じよう 情ばかり
こわ 剛くなるものと聞いております。 おおごしよ 大御所ほどの弓取も
やはりこれだけは しもじも 下々のものと少しもお変りなさりま
せぬ。正純も弓矢の故実だけは いさ 聊かわきまえたつも
りでおります。直之の首は一つ首でもあり、目を見開

いておればこそ、御実検をお断り申し上げました。それを強^しいてお目通りへ持つて参れと御意^{ごい}なさるのはその好^よい証拠ではございませぬか？」

家康は花鳥^{かちょう}の襖^{ふすま}越しに正純の言葉を聞いた後^{のち}、もちろん二度と直之の首を実検しようとは言わなかった。

二

すると同じ三十日の夜^よ、井伊掃部頭直孝^{いいかもんのかみなおたか}の陣屋^{じんや}に召し使^{にわか}いになつていた女が一人俄に氣の狂つたように叫び出した。彼女はやつと三十を越した、古千屋^{こちや}とい

う名の女だった。

ばんだんえもん

「塙団右衛門ほどの侍さむらいの首も大御所おおごしよの実検には具そなえ

おらぬか？

それがし

ひとて

某も一手の大将だったものを。こうい

う辱しめを受けた上は必ず崇たたりをせずにはおかぬぞ。

はずか

……」

古千屋はつづけさまに叫びながら、その度に空中へ

踊おどり上ろうとした。それはまた左右の男女なんによたちの力も

ほとんど抑えることの出来ないものだった。凄すさまじい

古千屋の叫び声はもちろん、彼等の彼女を引据えよう

とする騒さわぎも一かたならないのに違いなかった。

井伊の陣屋の騒さわがしいことはおのずから徳川家康とくがわいえやすの

耳にもはいらない訣には行かなかつた。のみならず直孝は家康に謁し、古千屋に直之の悪霊の乗り移つたために誰も皆恐れていることを話した。

「直之の怨むのも不思議はない。では早速実検しよう。」

家康は大蠟燭の光の中にこうきつぱり言葉を下した。夜ふけの二条の城の居間に直之の首を実検するのは昼間よりも反つてものものしかつた。家康は茶色の羽織を着、下括りの袴をつけたまま、式通りに直之の首を実検した。そのまた首の左右には具足をつけた旗本が二人いずれも太刀の柄に手をかけ、家康の実検する

間はじつと首へ目を注いでいた。直之の首は頼たれ首ではなかった。が、赤銅色しやくどういろを帯びた上、本多正純ほんだまさずみのいったように大きい両眼を見開いていた。

「これで塙団右衛門も定めし本望でございましょう。」
旗本の一人、——横田甚右衛門よこたじんえもんはこう言つて家康に一礼した。

しかし家康は頷うなずいたぎり、何ともこの言葉に答えなかった。のみならず直孝を呼び寄せると、彼の耳へ口をつけるようにし、「その女の素姓すじようだけは検しらべておけよ」と小声に彼に命令した。

家康の実検をすました話はもちろん井伊の陣屋にも
伝わって来ずにはいなかった。古千屋こぢやはこの話を耳に
すると、「本望ほんもう、本望」と声をあげ、しばらく微笑を浮
かべていた。それからいかにも疲れはてたように深い
眠りに沈んで行つた。井伊の陣屋の男女なんによたちはやつと
安堵あんどの思いをした。実際古千屋の男のように太い声に
罵ののり立てるのは気味の悪いものだったのに違いな
かった。

そのうちに夜よは明けて行つた。直孝なおたかは早速古千屋さつそくこぢやを

召し、彼女の素姓すじようを尋ねて見ることにした。彼女はこういう陣屋じんやにいるには余りにか細い女だった。殊に肩の落ちているのはもの哀れよりもむしろ痛々しかった。

「そちはどこで産うめたな？」

「芸州げいしゅう広島ひろしまの御城下ごじょうかでございます。」

直孝はじつと古千屋を見つめ、こういう問答を重ねた後、のち徐おもむろに最後の問を下した。

「そちは塙はんのゆかりのものであろうな？」

古千屋ははつとしたらしかった。が、ちよつとためらった後、のち存外ぞんがいはつきり返事をした。

「はい。お羞はずかしゆうごございますが……」

なおよき

直之は古千屋の話によれば、彼女に子を一人生ませ
ていた。

「そのせいでございましょうか、昨夜も御実検下さら
ぬと聞き、女ながらも無念に存じますと、いつか正気
を失いましたと見え、何やら口走ったように承わつて
おります。もとよりわたくしの一存には覚えのないこ
とばかりでございしますが。……」

古千屋は両手をついたまま、明かに興奮しているら
しかった。それはまた彼女のやつれた姿にちようど朝
日に輝いている薄ら氷に近いものを与えていた。

「善い。善い。もう下つて休息せい。」

直孝は古千屋を退けた後、もう一度家康の目通りへ出、一々彼女の身の上を話した。

「やはり塙団右衛門にゆかりのあるものでございました。」

家康は初めて微笑した。人生は彼には東海道の地図のように明かだった。家康は古千屋の狂乱の中にもいつか人生の彼に教えた、何ごとにも表裏のあるという事実を感じない訣には行かなかった。この推測は今度も七十歳を越した彼の経験に合していた。……

「さもあるう。」

「あの女はいかがいたしましょう？」

「善よいわ、やはり召使よつておけ。」

直孝はやや苛いらだ立たしげだった。

「けれども上かみを欺あざむきました罪は……」

家康はしばらくだまつていた。が、彼の心の目は人生の底にある闇黒あんこくに——そのまた闇黒の中にいるいろいろの怪物に向つていた。

「わたくしの一存いちぞんにとり計はからいましても、よろしいものでございましょうか？」

「うむ、上を欺いた……」

それは実際直孝には疑う余地などないことだった。しかし家康はいつの間まにか人一倍大きい目をしたまま、

何か敵勢にでも向い合ったようにこう堂々と返事をした。
――

「いや、おれは欺あざむかれはせぬ。」

（昭和二年五月七日）

底本…「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書
房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11
月

入力…j.utyama

校正…かとうかおり

1999年2月3日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。